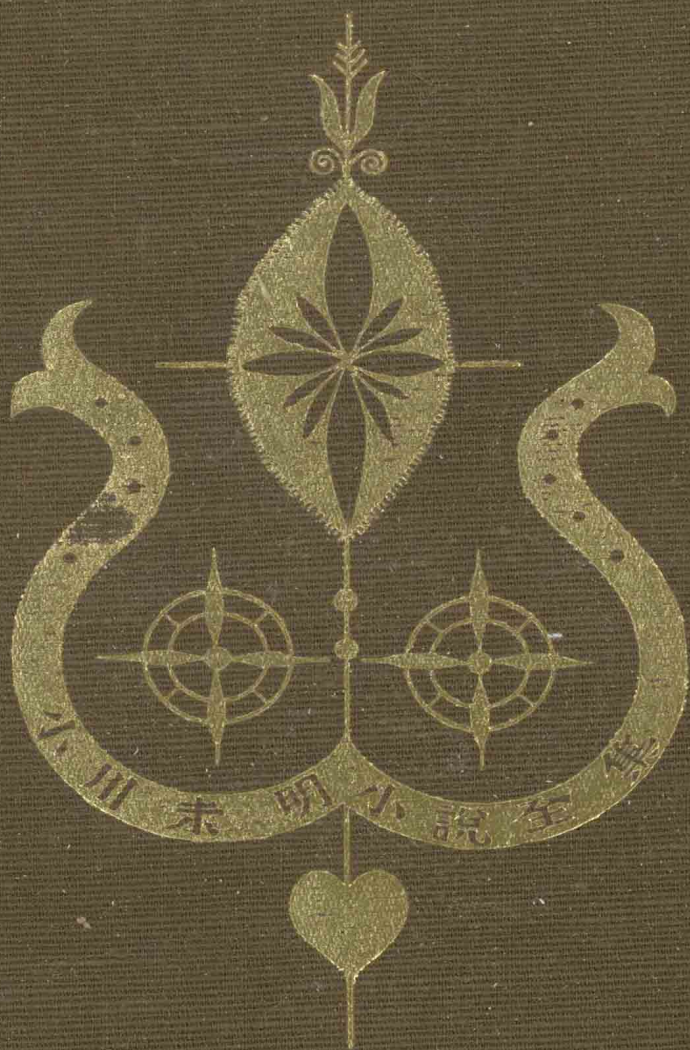






定

本

小川未明小説全集

1

# 定本 小川未明小説全集 1

## 小説集 I



昭和54年4月6日 第1刷発行

著者 小川未明

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03) 945-1111

振替 東京 8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

定価 3500円

---

©岡上鈴江 1979 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。(児一)

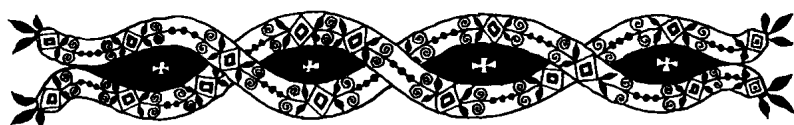
0393-448215-2253 (0)



# 定本 小川未明小説全集 1

## 小説集 I

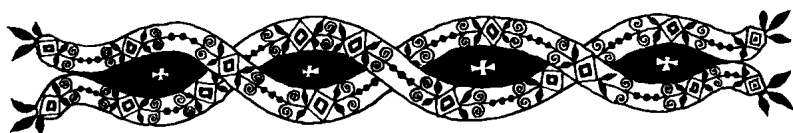
### 目次



|        |     |
|--------|-----|
| 人生     | 7   |
| 面影     | 12  |
| 乞食     | 17  |
| 田舎の理髪店 | 20  |
| 雲の姿    | 23  |
| 空想家    | 25  |
| 老宣教師   | 32  |
| 石火     | 38  |
| 日本海    | 41  |
| 霰に霰    | 44  |
| 漂浪兒    | 66  |
| 紅雲郷    | 85  |
| 旅の女    | 103 |
| 海鳥の羽   | 107 |
| 懷舊     | 112 |



|       |     |
|-------|-----|
| 越後の冬  | 282 |
| 啞     | 279 |
| 雷雨前   | 277 |
| 雪来る前  | 271 |
| 不思議な鳥 | 261 |
| 烏金    | 252 |
| 麗日    | 161 |
| 北の冬   | 155 |
| 酒肆    | 148 |
| 捕はれ人  | 143 |
| 老婆    | 137 |
| 暁     | 133 |
| 暗い空   | 127 |
| 櫛     | 125 |
| 日蝕    | 120 |



装丁

武井武雄

解説

山室  
静

39<sup>1</sup>

星を見て

370

過ぎた春の記憶

362

血

354

少年の死

347

薔薇と巫女

338

物言はぬ顔

299

日没の幻影

291

定本 小川未明小説全集 第一卷

小説集 I



# 人 生

一

丘の雑木林は木の葉が落盡して、地上に布いた栗の葉や其の他の黄ばんだ枯つ葉の上に生温かな光を秋の日が浴せてゐる。野にも畑にも、行く處毎に斯様な閑な光りが満ちてゐるかと思ふと、やがては寂しい、冷たい冬が来るのであらうと思つて、何となく沈んだ氣持でありながら、尙ほ春のことなども思ひ出されて、優しいなつかしい——誰人かに待たれてゐるやうな一種浮き立つやうな、氣持もする。と感ずる鼻の先に枯れた萱薄、如何にも淋しさうな野菊、何もそれが颯とでも風に揺れるのではないけれど、見てゐると灰色がかつた其色に只何となく哀れを感じて泣きたくなつた。

落ちた枯葉の上を軽やかに踏んで、男は雑木林の下で太い繩を造る機械車を廻はしてゐる。彼方に粗末な家が見えて、澄み渡つてゐる秋の空！ 恵み深いやうな、うすい日影が洩れてゐるのを、一人の男はさも無心に、熟として身動きもせずに悠然と車を廻はしてゐる。

彼の褐色を帯んだ落葉！ 冷たい大地に横はつてゐるのが、無残に踏み散らされて、折々幽かな音の聞える。一人の男はぐる／＼と繩車の廻るにつれて、繩のよれて行くのを見ながら、後前にと歩いてゐるが、是れ將たんと無心で眺めてゐるのらしい。……木の葉は何んな氣持でゐるよう？ やはり無心に……それとも浴びせてゐる優しい、暖かな日の光りを悲しども思つて、吸ひ込んでゐるのか……秋の日の光りは至つてかよいい！

雑木林の間から水色がかつた青い空が見える。うす青い空の下に粗末な一軒の小屋がある。峰や、林や、圍や、この生地のみゝの大自然！ を見ると何とも云へぬ一種慕はしい、悲しい氣持がする。

自分は佇ずんだまゝ、暫し、二人の男の方を見守つてゐた。やはり一人は無心で繩車を廻はしてゐる。一人は繩のよれるのを眺めてゐる。毎日、毎日彼等二人は、か

うやつて繩を製つて、製られた繩は市に賣られるのである。この二人の貧しい雇人（よめ）は彼の家に住んでゐるのだ。

一人の男は脊は低い（ひき）が肥つてゐる。一人の若者は、脊の高い瘦せた男である。脊の低い肥つてゐるのが車を廻はして、脊の高い瘦せてゐる年若な男は兩腕を組んで無心に繩のよれるのを眺めてゐる。

彼等には何様な樂（たの）みがあらうかと思つて、自分はまた彼等の身上（みづか）を考へながら、熟々と眺めてゐたのである。

斯様な單調な生活（せいかつ）にも、人生の波瀾（はらん）と名づくべきものが來る日があるであらうか。毎日此のやうに働いて、日を暮らして行くなら實に羨むべき境遇である！  
自分は恍惚として暫時は夢を見てゐるやうな氣持がした。かよわな日光を浴びて、冷たさうに濕つた地上に散り布いてゐる褐色（かっしやう）がかつた落葉（おちば）の色合！

さびしさうに見える二人の男……手を束ねて見てゐる一人と無心に車を廻はしてゐる男は、いつまであのやうに沈黙（サイマツ）をつゞけ得るぞ。

永劫に澄み渡つてゐる秋の空！ さびしい田野の景色！ うすい日の光を浴びてゐる藁（わら）ぶき屋根！ いつま

でも、雑木林（ぞふぎりん）では二人の男が繩車を廻はしてゐる！

## 二

何といふ哀しげな歌の調（しらべ）であらう。肥つた脊の低い方が歌ひ始めた。やはり繩車を廻してゐながら。キリ／＼と廻る繩車の……疾くもなく、遅くもなく、ちやうど歌ふ節と穩かな調子を合せて律呂的に響いて聞える。

あゝ、斯様に青く澄み渡つてゐる空に、何うして斯様な悲しい歌を聞くのであらう……。

自分は男の歌ふ歌の節を聞いて一段と悲しくなつた。忘れてゐた愁（うれ）ひや、悲しみが再び胸に萌（も）して氣も漸々遠くなるやう……それは、北國に居た時分に屢々聞き慣れてゐた副調であつた。

沈鬱（ちんうつ）な暗い／＼北國の空！ あゝ、杜や、山や、冬枯野邊の故郷の景色が目に見えるやうだ。立つてゐると里川堤（がはづみ）の柳の枯葉（かれは）が降りしきるやうに衣にかゝつて、霞まじりの北西の風が寒う吹いて、膚に浸みるのである。自分は昔の記憶を心の裡に呼んで、考へるともなく想ひを廻らしてゐると、寂しい／＼野路を荷車の轍（わだち）の響（ひび）き、

滅入るやうに遠くに鳴渡るかと思ふと、此度は耳許に彼の男の歌ふ聲が、或は低く、或は高く……、或は高く、時として滅入るやうに幽かに聞えて来る。見ればやはり、一人の若者は無言で首垂れたまゝ耳を傾けてゐる。

其歌は哀れつぽい戀歌であるが、何と云ふか文字には書けぬ。たゞ其の歌ふ節の、昔ながらの片田舎の、寂しい、遠い故郷を目の前に思ひ浮めて、聞いてゐると涙を催して来るので、かう考へる間にも耳に響いてゐるやう……。

……………コレシヨ、

……………エイ、エーイ……………  
と溜息を吐くやうな、情の切な……。

自分はいつしか茫然として、雪催ひの晩方、遠くの山里を望んで、野も山も雪で眞白な、杜や林の鬱蒼としたのが、遠方近方に黒ずんで見え、人通りの稀な村端に立つてゐる氣持になつた。と、うす青い夕靄が向うの寺の杉林の邊りに鎖し初めて、鳥が二三羽、沈靜な冬の夕暮の空氣に羽音を刻んで西の遠山里へと飛んで行くのを見ると、遽かに遠方にゐる人が誰れとなく戀しくなつて、たゞ其人が可哀さうな、さう思ふ自分も可哀さうで、而

して海の遠鳴りが、いかにも沈鬱に聞えて来る……灰色がかつた北方を見る目も愁ひの雲に掻き曇つて、獨りできりとめのない空想やら、悲しさやら、懷疑やらで煩悶し懊惱するのである。で五郎作の家の前を通ると、やはり例の節で歌うてゐるのが聞こえた。

仄暗い藁屋の内を覗くと、圍爐裏の端に五郎作は胡坐を組んで、酒を仰ふりながら歌うてゐる。其の時自分は何とも聲をばかけずに只通り過ぎてしまつた、それを今に覺えてゐる。

かうやつて二人、いつまでゐるのだらう。……はつたりと、繩車の音はやんだ。二人の男は互に物も言はんで、雜木林を出て、向うに見える藁屋の方へ歩いて行く。懷手をしながら、かよわな温かさうな日光を身に浴びて、先に歩いてゐるのは肥つた背の低い男、後から従いて行くのは年若な方で畔道を踏ながらに、高く、青く、澄でゐる秋の空を仰いだ。がやがて又俯目になつて後姿もだん／＼と小さくなつた。斯様仕事をしてゐるにもやはり休息が必要と見える。

自分は人生の慰安といふことに就て考へながら道を歩いた。不思議なものだ。無爲に住する者は無爲に満足す

ることが出来んで、やはり新たな更に一段無爲な言はば空想の境を求めつゝ、そこに慰安を見出さんと思つてゐるらしい。あゝ、彼等もやはり何かに憧れてゐる者であるのだ！

### 三

小道はだら／＼坂になつて、濕っぽい、うす暗い杉の林の下に出ると、日の光が蔭つて、荷車の轍の跡が地上に深く刻まれてゐる。自分の心は目に見えぬ一種の神秘に感じたかのやうに、妙に冷たい氣持がした。冷たい氣持がすると熟々と昔の戀の痛みを心の底に覺えた……、それは意識的に思ひ浮めたのでなかつた。忽ち其の痛みも忘れてしまひ、ふら／＼と此の裏悲しい、田舎道を何の氣なしに歩いてゐると、林の中で木を挽く音が聞こえる。それが冬の空氣に鈍ぶつた反響をして譬へば木精の眠りを醒まさうとしてゐるやう。見ると薄暗い林の中に人影は見えんけれど、車が引入れてあつて、白く皮を剥いた杉の木が五六本積み重ねてあつた。あゝ先刻の轍の印！ 深く地に喰ひ込んでゐるのは、此の重い車の

轍の跡であつた！ 自分は此の白う皮を剥ぎ去られてゐる木を見て、不快な心持がした。草木は無神經で非情だといふけれど、何となく殘忍な氣持がする。而して此時初めて木樵を仕事とする者は、殘忍であると思つた。うす暗い林の下道を出ると、寂しいもはや冬枯野邊の見える河添の街道を行くのである。既に／＼葉の落ち盡した木立が、幾本となく冬空に聳えて、小枝を交へてゐる。雲切がして、青い空も見えてゐるけれど、何となく夕暮の日の光は薄くて、陰り勝ちで、遠山の麓を見ると氣が滅入る。而して其のまた遠い／＼山には雪が來てゐると見え、さながら昔の記憶を湛へてゐるやうな薄青い空に花崗石のやうな鋸形の山が見えるのである。

「ギイ、ギイ……、ギイ……ギイ、コトーン！」

と繰返し／＼、淋しい自然と相對して、さもさびしげに自然を慰めるやうな水車の音！ 眺むれば曾て、晝に見たことのあるやうな景色！ 一軒の水車場が傾いて、流に臨んでゐる。

ちよろ／＼と流るゝ水の音をきいてゐると、折々其の静けさを破る水車の音と水とが或調和を保つてゐるやう。而して之れが人生を歌ふ唄のやうにも思はれた。

水車！ 水車……あゝ、此時思ひ浮めた、子供の時分  
によくうたうた歌

「水車！ 水車！ 水のまに／＼」

めぐるなり。やあまず、めぐれよー

やあまず、めーぐーれーよー。」

夕焼の空紅かくとした夕暮方、故郷の里川の、水車の  
ある橋の上に立つて、町や、海の見える西方を望んで、  
友達と共に聲を揃へて、高らかに此歌を歌うたものであ  
る。……行く雁の二連、三連……も見られた。

今迄、温かさうに衣の上に落ちてゐた日光が、又一團  
の白雲に隠れて、天地も仄の暗く、蔭つた。すると冷た  
い風が吹くのである。

自分は路傍の店頭で熟柿を並べてある家の前を通る  
と、未だ年の若い赤い襷を掛けた女が、框に腰をかけ  
て、柿の皮を剥きながら、さも甘さうに嚙つてゐた。  
ちよつと見たのであるが、どうやら其の女は孕んでゐた  
やうに思つた。

其の家の前に遊んでゐる、三ツか四ツばかりの稚子  
が、緋色の野菊の花を掌でむしつては濕り勝ちな地上に  
撒いて、それを小さな下駄で踏みにじつてゐたが、自分

が傍を通りすると顔にさびしげな笑ひを浮めて自分を  
見上げた。自分も眠て其の子の顔を見ただけれど笑ふ氣に  
はなれなかつた。……自分は斯様な子供にも、やはり  
獸性な性質が存してゐるのかと思つた。

沈鬱な氣持は、更に沈鬱を増して來る空模様！ 村端  
に來かゝると一人の旅僧に出遇つた。頬の肉は落ちて、  
目は窪んでゐた。白の脚絆を穿き、墨染の衣を着て、瘦  
せ細つた手に白木の杖を突き、汚れた白地の小さな風呂  
敷包を背負つて行く姿……年は六十の上を越えてもゐよ  
うか。あゝ、此の寒空に何處へ行くのであらう！ 願向  
くと其姿が何んでも彼の遠い／＼青い雲切のしてゐる空  
の彼處へと憧れてゞも行くやうに思はれて悲しくなつ  
た。して先刻がた見た、伐り倒された杉の木も荷車に積  
まれて此街道を何處にか運び去られるのであるが、やは  
り、あの杉の木も、遠方へ此林から引き離されるのであ  
るまいか。

水車場の小舎は霞んで見え、杉林も彼方に黒く見えて  
ゐる。

自分は散歩がてら、あてなく歩いてゐたが、いつの間  
にか日は暮れてしまつた。

## 面影

ハーン先生の一週忌に

一

獨り、道を歩きながら、考へるともなく寂しい景色が目の前に浮んで来て胸に痛みを覺えるのが常である。秋の夕暮の杜の景色や、冬枯野邊の景色や、なんでも沈鬱な景色が幻のやうに見えるかと思ふと遽ち消えてしまふ。

消えてしまつた後は、いつも惘として考へるのである。なんでこんな景色が目に見えるのであらう。誰のこゝとを自分は思つてゐるのか？ 氣に留めて考へれば空漠として、悲しくも、喜ばしくもないが、靜かに落付てゐると胸の底から細い、悲しい、囁きのやうに、痛むともなく痛みを覺えて、沈鬱な寂寞たる夕暮の田園の景色な

どが瞭々と目の前に浮んで来る。

あゝ、自分はなぜこんなに悲しい氣になるのであらうか。もう／＼彼女のことは思ひ切つてゐるのにと自から心を勵ますけれど、熱い涙が知らずにぼた／＼と落ちる。物の哀れは之よりぞ知るとよく言つたものだ。自分は曾て雜司ヶ谷の鬼子母神に參詣して御圖を引いたこともあつたが……やはり行末のことや、はかない戀をそれとも知らなかつたからである——この道を行けば、やがて鬼子母神の境内に出るのだが、もう草は枯れてゐる。圍のものも黄ばんでしまつた。なんだか斯う、彼女の面影が目に見えて来る。さういへば此の道を去る秋、共に通つたことがあつたのである。

あゝ、もう／＼思ふまい／＼、悲しいんだやら、かう氣が焦つてくるばかりで、やはりこれが悲しいんであらう。涙が知らずに湧いて来る。

どれ、ハーン先生の墓にでも詣らう。……

二

思へば一昨年、ちやうど季節は夏の始めである。青葉

の杜（も）を見ても、碧色（へきしき）の空（そら）を見ても何（なん）となく、かう戀人（こひびと）にでも待（まち）たるゝやうな、苦（くる）しいかと思（おも）ふと悲（かな）しいやうな、又物（もの）哀（あは）れな慕（した）はしげな氣持（きもち）のする頃（ころ）であつた。

自分は學校（がく）の窓（まど）から裏庭（うらてい）の羅漢松（らかんそう）の芽（め）の新（あらた）なる緑（みどり）を熟（じやく）と見入（みい）つて色々（いろいろ）の空想（くうきやう）に耽（ふけ）つてゐた。するとベルが鳴（な）つてハーン先生（せんせい）が來（き）たのである。此（こ）の日（ひ）初めて先生（せんせい）の顔（かほ）を見るのだ。

先づ空想（くうきやう）に浮（う）んだのは此（こ）の人（ひと）が希臘（ギリヤ）に生（な）れ、西印度（にいんど）諸島（しよとう）や、其（そ）の他（た）諸方（しよほう）を流浪（るろう）して來（き）たと云（い）ふことである。背（せ）の低い眇目（びやうもく）の、顔付（かほづき）のどこことなくおつとりとした鼠色（ねずみいろ）の服（ふく）を着（き）てゐなざる。幾人（いくにん）の兄弟（けいだい）や、姉妹（せまい）があり、父（ちち）や母（はは）は何處（いづく）にどうして、而（そ）して眞面目（まじめ）な戀（こひ）もあつて、それが成就（じやうじゆ）しなかつたのではあるまいか。などと種々（うろろ）の空想（くうきやう）を廻（めぐ）らしてゐた。やがて講義（かうぎ）が終（は）つてから、運動場（うんどうじやう）に出て、羅漢松（らかんそう）の木蔭（かげ）の芝生（しば）の上に腰（こし）を下（くだ）して漫々（まんまん）たる碧空（へきそう）に去來（きよらい）する白雲（はくうん）の影（かげ）を眺（なが）めてゐると、靈動（れいどう）する自然界（じやけんがい）が、自ら自我（おのづかじが）に親（した）しみ來（き）るやうに思（おも）はれる。そこひなき圓（まる）い空（そら）、寂（さび）しさうな白雲（はくうん）、袂（たもと）におとづれる風（かぜ）のさゝやき。雲（くも）を踏（ふ）み、海（うみ）を渡（わた）り、親（おや）もなく、兄弟（きょうだい）もなき異郷（いきやう）に漂浪（ひょうろう）する、先生（せんせい）の身（み）が可哀（かな）さうになつて來（き）る。今（いま）も尙（な）ほ

優しい餘韻（よゐん）のある、情熱（じやうねつ）の籠（こも）つてゐる講義（かうぎ）の聲（こゑ）が律呂（りつりよ）的に耳許（みみもと）に響（ひび）いてゐるやうな。

而（しか）して熟（じやく）くと穩（うづ）かな容貌（かほづか）が慕（ほ）はしうなり、又自分（おのれ）も到底（たいてい）此（こ）の先生（せんせい）のやうではないけれど、やはり歸趣（きすう）なき、漂浪（ひょうろう）兒（こ）であるといふ寂（さび）しい感（かん）じになつた。

\* \* \* \* \*

この光榮（こうえい）ある詩人（しじん）が、遽（は）かに永劫（えいけつ）の樂園（らくえん）を暮（ま）うて沈黙（しんもく）の海（うみ）に消（き）え、紫色（むらさきいろ）の……さながら夢（ゆめ）のやうな……さながら消（き）えた悲（かな）みのやうな、遠（はる）いまた杳（はる）かな島山蔭（しまやまかげ）の波（なみ）間（ま）に見える、永劫（えいけつ）の夏（なつ）の淨土（じやうど）に憐（あは）れ、漕（こ）いで行（い）つてしまはれた夕暮（ゆふぐれ）、我（われ）は悲（かな）しみにたへやらず、君（きみ）の行方（ゆくへ）なつかしく、美しい茜色（あかねいろ）の西（にし）の天空（てんくう）を、野越（のこ）え、山越（やまこ）え、森（もり）越（こ）えて眺（なが）めやり、松樹（しょうじゆ）影（かげ）暗（く）く繁（しげ）る、瘤寺（うぶでら）の、濕（しめ）れる墓畔（ぼはん）に香（かう）を焼（や）いて、縷々（るる）として寂寞（さびさび）の境（さかい）に立ち上（のぼ）る、細（ほ）い／＼青烟（せいえん）の消（き）えゆくを見るも傷（いた）ましく、幾（いく）たびも／＼空想（くうきやう）を破（やぶ）る鐘（かね）の響（ひび）に我（われ）知らぬ暗涙（あんなみ）をたたへたことであつた。——思（おも）ふともなく、其（そ）の日（ひ）のことが思（おも）ひだされて、未（いま）だに其（そ）の時（とき）の光景（かりやま）が瞭々（ありあり）と目（め）に浮（う）んで來（き）て堪（た）へられぬ。

この春のことであつた。北國のある町を歩いてゐると立琴のやうなものを鳴らして乞食が通るのを見た。其の男の容貌がいかに「日まはり」の一章に讀だ乞食と似てゐる。何となく悲しく、鳴らしてゐる立琴の音を聞きつゝ、空想に耽つてゐると其の男の姿は遠くなつて見えなくなつた。……あゝ、彼も漂浪人かと思ふと、つい熱き涙が目の中に湧くのであつた。

ハーン先生の文は、この琴の音の人をひく力のやうにどこか哀れな寂しい、細い澄んだ響きを傳へてゐた。

——何となく沈痛！ 何となく悲哀！ の響きがある。

人生には悽慘の氣が浸透してゐる。春花、秋月、山あり、水あり、紅、紫と綺羅やかに複雑に目も文に飾り立てゝゐるけれど、歸する處沈痛悲哀の調べが附纏うて離れぬ。酔うたる人は醒むる時の來るが如く、樂める者、驕れるもの、悦べるもの、浮かるゝもの、早晩傷み、嘆き、悔い憂ふる時の來ることを免れない。

誰か青春の美酒に酔うては歌はざらん。誰か凋落の秋

に遭うては酸鼻せざらん。人生酔うては歌ひ、醒めては泣く、就中余は孤愁極りなき、漂浪人の胸中に思ひ到る毎に堪へがたき哀れを感じて、無限の同情を捧ぐるのである。

さすらひ人！ いかなれば君獨り愁へ多きや。飛ぶ雲の影を見れば故郷の山を思ひ、うらゝかなる春の日に立つ野山の霞を見る時は、ありし昔の稚子の面影を偲ぶ。里川の流れ迢々たる目に浮び、何處よりか風のもて来る餘韻悲しき、村少女の戀の小唄も耳に入る。……故郷を離るゝ幾百里、望めば茫々として空や水なる海、山の上にも山ある山國に母を憶ひ、父を憶うて、戀しき弟妹の面影を偲ぶ心如何ならん。

さすらひ人！ いかなれば君獨り愁へ多きや。男子苟も志を立てゝ生活の戦場に出で人生に何等かの貢獻を試みんと決したる上は、たとへ陽九たび廻り、血潮の汗に五體は涵るとも野に於いて、市に於いて、鋤に、鋤に、劍に、筆に奮迅の苦闘を敢てする腕も、勇氣もあるものゝ、只彼の浮世の風波に堪へ得ぬ花の如き少女のおゝ、我が戀人は今頃いかに、今宵をいかに送るならんと空の彼方、見よ月に雲のかゝり、忽ち勇氣の挫けて暗